The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フランス語前置詞àに関する発話言語学的研究
Author(s)	梶原, 久梨子
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/103107
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　梶原　久梨子　）	
論文題名	フランス語前置詞àに関する発話言語学的研究

論文内容の要旨

本研究は、フランス語の前置詞 àの多様な用法に潜在する共通性を明らかにすることを目的とする。àは、空間的・時間的な文脈に限らず、行為の対象・手段・所有関係など、非常に広く用いられ、「空の前置詞」「無色透明の前置詞」といわれるほど抽象度が高い。空間的にはJe suis à Paris.（パリにいる）のような「～に」という位置、存在点を表す用法と、Je vais à Paris.（パリへ行く）のような「～へ」という方向を表す用法がある。しかし、àは共起する語や文脈に応じてさまざまな振る舞いをする。以下はそのごく一例である。

(1) J'emprunte un livre à Jean.
　ジャンから本を借りる。
(2) jouer à la poupée
　人形で遊ぶ
(3) écrire au crayon
　鉛筆で書く
(4) couteau à beurre
　バター用ナイフ
(5) glace à la pistache
　ピスタチオ味のアイス

本論文では、このような一見するとばらばらであるかのように思われるàの用法に共通する機能を探る。Langacker（1987）のイメージ・スキーマを用い、àを含むさまざまな動詞句と名詞句において、その構造および意味を構成する上でàがどのような機能を果たしているかを視覚的に表す。そのうえで、フランスの言語学者Antoine Culioliが提唱するThéorie des Opérations Prédicatives et Enonciatives（発話言語学、以下TOPE）の枠組みから、定位操作（repérage）によって、àが果たす機能の説明を試みる。これにより、フランス語の前置詞àについて多義という捉え方を超えて、言語使用における根幹的な操作のあり方を明らかにすることを目指す。

第1章では、本論文の目的と構成を述べる。

第2章では、フランス語の前置詞の先行研究を概観するとともに、本論文で用いる認知言語学とTOPEの理論を確認する。

第3章では、形式<V à N>を対象とし、さまざまな関係を意味する動詞句においてàがどのように機能しているのかを考察する。一見すると、方向（X aller à Y:XはYに行く）や分離（emprunter X à Y:YからXを借りる）とされる用法は、àが何らかの方向を表しているように見えるが、それらは動詞による方向付けであり、à自体はXがYに位置付けられた接点、あるいはXがYに存在するという関係をプロファイルしていることを、イメージ・スキーマを用いて示す。手段（X écrir à Y:XはYで書く）や活動（X jouer à Y:XはYで遊ぶ）の用法もここで論じる。

第4章では、形式<V1 à V2 / V1 de V2>において、àを用いる構造とdeを用いる構造の使い分けの検討を通し、それぞれの構造でàが用いられる理由を考察する。前半では、アスペクト動詞であるcontinuer à/de（～を続ける）を扱う。continuer àとcontinuer deは、大きな意味の違いがないと言われることもあ

り、その使い分けは曖昧である。continuer（続ける）という動詞がPを続けることを表すが、逆説的に¬Pのイメージが含意されることに着目する。コーパス（Frantext）を用い、continuer àが使用されやすい条件は、一人称主語・二人称主語・命令文・理由を問う疑問文であることを示す。そしてそれらに共通するのはPと¬P が発話者によって意識されやすい条件であることを述べ、発話者はこのような文脈ではXをYに位置付けるàを選択することを述べ、動詞のもつ意味とそれが使用される文脈の相互作用によって前置詞が決定されることを示す。

そして後半では、se décider à/décider de（～を決める/（迷った末に）決心する）のような心理的活動を表すse V1 à V2構文と、それに対応するV1 de V2構文をGoldberg（1995）の構文文法の観点を取り入れ論じる。本論文で扱うのは、以下のような例である。

(6) J'ai *décidé de* partir demain.
私　複合過去タ　DÉCIDER　DE 出発する　明日
私は明日出発することにした。

(7) Je *me* suis enfin *décidé à* acheter une voiture.
私　SE　複合過去タ　結局　DÉCIDER À　買う　不定冠詞　車
私はついに車を買うことを決心した。（春木2002）

このような形式を取るのはペアとして、他にはdécider de/ se décider à（～を決める/（迷った末に）～を決心する）, résoudre de/ se résoudre à（～を決める/観念して～をする）, refuser de / se refuser à（～を拒む/～を拒む）, essayer de/ s'essayer à（～をやってみる/～に挑戦する）, risquer de/ se risquer à（～の可能性がある/決死の覚悟で～する）が挙げられる。各動詞のペアのそれぞれの使用条件を分析し、形式 : se V1 à V2に対し、その意味は、（¬Pを志向しつつ）主体の行動V1はV2で表されるPに向かう（結果としてPを選択する）であることを述べる。つまり、continuer àと同様に、àが含まれる構造にはPと¬Pが存在し、Pを選択する構造である。Yが複数の中から選択されるというのは<V1 à V2 / V1 de V2>に限られることではない。空間的な動詞のaller à（～へ行く）とvenir de（～から来る）や、アスペクト動詞のcommencer（始める）がàをとることが圧倒的に多いこと、finir（終える）がdeしかとらないことからも確認できる。tenir à/de（～に接着する、執着する/～に由来する）など、àとdeが交替することで意味が異なる自動詞のペアにおいても成立することを示す。

第5章では、<N1 à N2>の形式で、「特徴」「用途」「料理名」を表す用法において、àがその意味形成に関してどのような機能を果たしているかを分析し、他の前置詞との比較を通し、いずれにおいてもàは「本質的な特徴付け」というはたらきを行なっていることを示す。5.1.では、YがXの特徴を表す用法を、人物の特徴（garçon aux yeux belus青い目の少年）と、物の特徴（robe à pois水玉のワンピース）に分け考察する。ここではそれぞれ同伴や付属を表す前置詞avecを含む<N1 avec N2>と対照し、avecは付加的な要素としてYを結びつけるのに対し、àはXの本質的な特徴付けを行っていることを示す。5.2.では、YがXの用途を表す用法を考察する。couteau à beurre（バターナイフ）などの例を取り上げ、àによってYが結びつけられることでXの元々の性質が変化すること提示する。またcrème pour le corps（ボディクリーム）など、pourを用いた用途的な意味を表す名詞句と比較を行い、àはXをYによって本質的に変化させ新しい語彙的カテゴリーを形成するのに対し、pourは使用者や使用される対象を導入しており、あくまでXはYに向けられた別個の存在として捉えられていることを示す。5.3.では、YがXの味や調味料、具材などを表す用法を考察する。glace à la pistache（ピスタチオアイス）やcafé au lait（カフェオレ）などの例を取り上げ、Yには範列関係が成立することを論じる。そしてsalade de pomme de terre（ポテトサラダ）など<X de Y>の形式を取る料理名と比較し、àはXとYを統合し、弁別的に機能することを述べる。いずれの用法もイメージ・スキーマによって可視化し、àは一貫してXをYに位置付ける機能を果たしていること、そしてXにYを結びつけることでXを本質的に特徴付け、à Yが弁別的にはたらいたり統合的にはたらいたりすることを確認する。

第6章では、それまでの章で論じたàの「XをYに位置付ける」という機能を、TOPEの中心的な概念であるrepérage（定位付け）という操作の観点から捉え直し、各用法を分析する。repérageはあらゆる語に認められるが、その中でもàはdifférentiation（区別）に特化する前置詞であることを述べる。

本章で用いたTOPEの「定位」という概念によってàの機能を捉えようとするアプローチは、イメー

ジ・スキーマを通して捉える空間に結びついた認識の仕方を、発話文脈においていかに意味を構築していくかという視点から再解釈するものである。第3章から第6章の分析を通し、àの多様な用法の背後にある共通の機能を探り、意味を構築する際にどのような操作を行うかを明らかにすることを目指す。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　梶原久梨子　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	井元　秀剛
	副 査	准教授	髙橋　克欣
	副 査	教授	田村　幸誠

論文審査の結果の要旨

梶原久梨子氏の博士論文『フランス語前置詞àに関する発話言語学的研究』は、フランス語の前置詞 à の多様な用法に潜在する共通性を明らかにすることをめざしたものである。à は、空間的・時間的な文脈に限らず、行為の対象・手段・所有関係など、非常に広く用いられ、「空の前置詞」「無色透明の前置詞」といわれるほど抽象度が高い。空間的にはJe suis à Paris.（パリにいる）のような「〜に」という位置、存在点を表す用法と、Je vais à Paris.（パリへ行く）のような「〜へ」という方向を表す用法がある。しかし、à は共起する語や文脈に応じてさまざまな振る舞いをする。一見するとばらばらであるかのように思われるà の用法に共通する機能を探ることが本研究の目的である。本論文は7章より構成されており、各章の概要は以下の通りである。

第1章では、本論文の目的と構成を述べる。

第2章では、フランス語の前置詞の先行研究を概観するとともに、本論文で用いる認知言語学とTOPEの理論を確認する。

第3章では、形式<V à N>を対象とし、さまざまな関係を意味する動詞句においてà がどのように機能しているのかを考察する。一見すると、方向（X aller à Y ： XはYに行く）や分離（emprunter X à Y ： YからXを借りる）とされる用法は、à が何らかの方向を表しているように見えるが、それらは動詞による方向付けであり、à 自体はXがYに位置付けられた接点、あるいはXがYに存在するという関係をプロファイルしていることを、イメージ・スキーマを用いて示す。手段（X écrire à Y ： XはYで書く）や活動（X jouer à Y ： XはYで遊ぶ）の用法もここで論じる。

第4章では、形式<V1 à V2 / V1 de V2>において、à を用いる構造とdeを用いる構造の使い分けの検討を通し、それぞれの構造でà が用いられる理由を考察する。前半では、アスペクト動詞であるcontinuer à/de（〜を続ける）を扱う。continuer à とcontinuer de は、大きな意味の違いがないと言われることもあり、その使い分けは曖昧である。continuer（続ける）という動詞がPを続けることを表すが、逆説的に¬Pのイメージが含意されることに着目する。コーパス（Frantext）を用い、continuer à が使用されやすい条件は、一人称主語・二人称主語・命令文・理由を問う疑問文であることを示す。そしてそれらに共通するのはPと¬P が発話者によって意識されやすい条件であることを述べ、発話者はこのような文脈ではXをYに位置付けるàを選択することを述べ、動詞のもつ意味とそれが使用される文脈の相互作用によって前置詞が決定されることを示す。論証にあたっては各動詞のペアのそれぞれの使用条件を分析し、形式：<se V1 à V2>に対し、その意味は、（¬Pを志向しつつ）主体の行動V1はV2で表されるPに向かう（結果としてPを選択する）であることを述べる。つまり、continuer àと同様に、àが含まれる構造にはPと¬Pが存在し、Pを選択する構造である。Yが複数の中から選択されるというのは<V1 à V2 / V1 de V2>に限られることではない。空間的な動詞のaller à（〜へ行く）とvenir de（〜から来る）や、アスペクト動詞のcommencer（始める）がàをとることが圧倒的に多いこと、finir（終える）がdeしかとらないことからも確認できる。tenir à/de（〜に接着する、執着する/〜に由来する）など、à とdeが交替することで意味が異なる自動詞のペアにおいても成立することを示している。

第5章では、<N1 à N2>の形式で、「特徴」「用途」「料理名」を表す用法において、à がその意味形成に関してどのような機能を果たしているかを分析し、他の前置詞との比較を通し、いずれにおいてもàは「本質的な特徴付け」というはたらきを行なっていることを示す。5.1.では、YがXの特徴を表す用法を、人物の特徴（garçon aux yeux bleus 青い目の少年）と、物の特徴（robe à pois水玉のワンピース）に分け考察する。ここではそれぞれ同伴や付属を表す

前置詞avecを含む<N1 avec N2>と対照し、avecは付加的な要素としてYを結びつけるのに対し、àはXの本質的な特徴付けを行っていることを示す。5.2.では、YがXの用途を表す用法を考察する。couteau à beurre（バターナイフ）などの例を取り上げ、àによってYが結びつけられることでXの元々の性質が変化することを提示する。またcrème pour le corps（ボディクリーム）など、pourを用いた用途的な意味を表す名詞句と比較を行い、à はXをYによって本質的に変化させ新しい語彙的カテゴリーを形成するのに対し、pourは使用者や使用される対象を導入しており、あくまでXはYに向けられた別個の存在として捉えられていることを示す。5.3.では、YがXの味や調味料、具材などを表す用法を考察する。glace à la pistache（ピスタチオアイス）やcafé au lait（カフェオレ）などの例を取り上げ、Yには範列関係が成立することを論じる。そしてsalade de pomme de terre（ポテトサラダ）など<X de Y>の形式を取る料理名と比較し、à はXとYを統合し、弁別的に機能することを述べる。いずれの用法もイメージ・スキーマによって可視化し、à は一貫してXをYに位置付ける機能を果たしていること、そしてXにYを結びつけることでXを本質的に特徴付け、à Y が弁別的に働いたり統合的に働いたりすることを確認する。

第6章では、それまでの章で論じたà の「XをYに位置付ける」という機能を、TOPEの中心的な概念であるrepérage（定位付け）という操作の観点から捉え直し、各用法を分析する。repérageはあらゆる語に認められるが、その中でもà はdifférentiation（区別）に特化する前置詞であることを述べる。本章で用いたTOPEの「定位」という概念によってà の機能を捉えようとするアプローチは、イメージ・スキーマを通して捉える空間に結びついた認識の仕方を、発話文脈においていかに意味を構築していくかという視点から再解釈するものである。第3章から第6章の分析を通し、à の多様な用法の背後にある共通の機能を探り、意味を構築する際にどのような操作を行うかを明らかにしている。

第7章は結語であり、これまでの考察のまとめと今後の展望が述べられている。

以上のように英語ではto, from, for, with, in, at、日本語であれば、「～へ」「～から」「～用の」「～で」等で表される内容に対応する広範な用法をもつフランス語の前置詞àを、認知言語学やTOPEの概念を用いて統一的に説明した意欲的な論文であり、論旨も明確ですぐれた論考となっている。ただ、本人の考察がぎりぎりまで進化を続けてきたせいか推敲がおざなりになり、多くの綴り字や例文番号のミスなどがみられたのは残念であった。論文全体の構成について、各章で論じられた内容同士の関係が明確ではないという問題がある。第３章と第４章では動詞句で用いられる à について論じられ、第５章では名詞句で用いられる à について論じられているが、動詞句で用いられる à と名詞句で用いられる à の機能にはどのような共通点や相違点があるのか、なぜ動詞句の分析を行ったあとに名詞句の分析を行ったのか、という点に関して十分な説明がなされていない。理論の面でもXとYを結びつけるものとして前置詞をとらえているが、そのXとYが具体的に何になるのか、それらをどう図示していくのかという点での厳密さに難点が見られた。例えばJe vais à Tokyo.ではXはJe、YをTokyoとすることは直感的にも理解できるが、Je me suis décidé à partir.となるとYは名詞句ではなく動詞句なのだからthingである名詞同士の関係と同じようにXYを図示することもできないし、se décider à全体の意味を述べることとàそのものの意味を述べることとは別である。また、continuer à のイメージ・スキーマでは、t2においてPの中断が強く喚起されることが図示されているが、ここで提示された図式が適切なものであるとはいいがたい。他にも、図22と図24のように、ほぼ同様でありながら細部が異なる図式が用いられているが、この違いが何に起因するものであるのかについても説明が必要であるように思われる。このように、本論文において提示されている図式の中には、より適切な形に修正する必要があると考えられるものが少なくない。TOPEの理論も抽象的な認知操作を仮定しており、どんな場合にでもあてはまりそうな認知操作を特に当該の現象の説明として用いる弊に陥りやすい。例えばPの背後に¬Pがあり、Pを述べることは¬Pを排除することである、というのはいかなる述定の場合にも基本的にあてはまる。そのためcontinuer deを説明するにあたって、continuerの意味そのものの説明では¬Pの意識を主張する一方、à との比較では逆に¬Pの意識を否定するなど、全く逆の素性を与えているようにみえてしまうし、6章で展開したrepérageやdifférentiationの概念もà だけがもつものではなく、どんな前置詞でも備えている機能なのではないか、という疑念をおこさせてしまう。

とはいえ、これらの問題は理論そのものに内包するものであって、本人の主張の欠陥ではなく、どの場合も説得力のある主張がなされていることには変わりがない。

以上から博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。